「知夫里島学び舎構想」の実現に向けて

はじめに

島根県隠岐郡知夫村は、島根県内唯一の村であり、島根半島沖合の北方約 40 ～ 80km の日本海上に浮かぶ隠岐諸島のうち最南端に位置します。島根県松江市美保関町七類港、鳥取県境港市境港からはフェリーで約2時間から2時間半を要します。

雄大な自然景観とともに豊かな地域資源を有し、他の隠岐3島3町と併せて大山隠岐国立公園に属し、隠岐ユネスコ世界ジオパークを構成しています。

本村の教育指針に「豊かな心を持ち、創造性に富み、たくましく生きる知夫の子」を育むことを基本に据え、知・徳・体の調和のとれた子どもの発達を促すことがあげられています。この指針をもとに今後の教育の在り方について検討してきたことを「知夫里島学び舎構想」として明確にしました（図1）。学校・家庭・地域が協働しながら、子どもたちにとって魅力ある教育環境を創出し、自然を生かした体力づくり、地域の伝統行事を通じた島の歴史文化の理解、国際化・情報化社会に対応した多様な教育を提供できる環境づくりを推進しています。

図1「知夫里島学び舎構想」（イメージ図）

1．学校と教育委員会と公民館的要素を持つ一体型校舎

平成 27 年度より県内2校目・隠岐4町村では初となる小中一貫校「知夫村立知夫小中学校」（以下、知夫小中学校）としてスタートを切り、学校だけではなく地域全体が学びの場であり、子どもからお年寄りまですべての世代が学べる環境を整えてきました。3 年後には校舎の改修によって教育委員会事務局が校舎内に配置されました。これによって学校と教育行政機関の連携が強化され、社会教育と一層連携したふるさと教育等が展開されるようになりました。また、同時期には地域に開放した学校図書館の運営も始まりました。公共図書館としての機能を果たすことによって、子どもたちと住民が入り混じる光景が日常的に見られます（図2）。この知夫村図書館は公民館

図２「知夫里島学び舎構想」（イメージ図）

的な役割も担っており、図書イベント等の企画によって住民が集う場にもなっています。

このように学校と教育委員会と公民館的要素を持った一体型校舎は、「知夫里村学び舎構想」の象徴とも言える建物となっており、教育の魅力化と地域の活性化を実現していくための拠点となっています。

2. ふるさと教育の推進

（1）「ふるさと教育担当者連絡会」による関係者の連携

平成 30 年より知夫小中学校は、「ふるさと教育担当者会」を中心に 9 年間のふるさと教育の学びの充実を図っています。子どもの頃からふるさと知夫里島・知夫村の魅力を体験しなければ、ふるさとに自信や興味は持てず、ふるさとに誇りや愛着がなければ、ふるさとには帰ってこなくなることから、「ふるさと教育」の推進は知夫里島学び舎構想の中核として位置づけられています。

「（地域に）浸り」「（地域について）知り伝え」「（地域の未来について）提案し」「（地域のために地域の大人と）実際に動く」という9年間の学びの流れのなかで、探究心を磨いていくための個別最適な学びや協働的な学びの在り方について探り続けています。担当者会は、小中学校のふるさと教育担当者、村の教育魅力化コーディネーター、派遣指導主事、派遣社会教育主事によって構成され、各学年の活動の進捗状況の共有や各種連絡等を行っています（図3）。

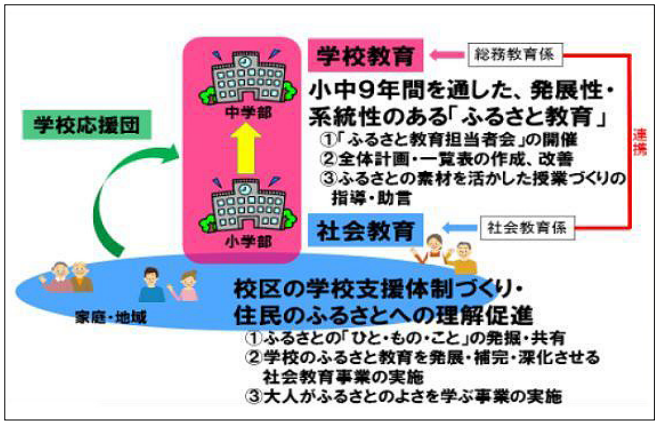

図3　ふるさと教育における学校教育と社会教育の連携

（2）教職員×教育委員会事務局スタッフによる作戦会議

令和 4 年度は 4 月の段階で職員会の場で「ふるさと教育わくわく大作戦」（図4）を企画、実施しました。先生方と教育委員会の連携を密にし、情報共有を行うことで、導入時期が遅くなりがちな総合的な学習の時間のアクセルを早めに踏むことができました。また、先生方の「やってみたい」という思いにマッチさせる情報提供を教育委員会事務局が担うことで、小学部 3･4 年生の島前神楽の継承、中学部 2 年生の職場体験学習でのプロジェクト活動といった新たな動きを生み出すきっかけともなりました。

図4　ふるさと教育わくわく大作戦

3. 知夫里島島留学

（1）知夫里島ならではの離島留学システム

知夫里島の自然環境、歴史、文化や、島民との交流、知夫里島での生活やここでしかできない体験活動を希望する島外の児童生徒を対象に、知夫村立知夫小中学校に「島留学」という形で受け入れるものです。知夫里島は人口 600 人程度の小さな島です。もとから住んでいる村民も、新しく来た島留学生も 600 人が家族のようになり、知夫里島が島留学生にとっての大切な場所になる。そんな島留学を目指し、平成 29 年度より始まりました。

島留学生は、島の「はぐくみ寮」で暮らします。掃除、洗濯、片付けなどは毎日自分たちでしています。どうすれば全員が楽しく、快適に暮らせるのかを考えて生活します。寮内には、地域の人と交流ができるスペースを広くとっており、寮生も地域に溶け込みやすい環境を作っています。現在は島留学生 6 名が生活し、村、教育委員会の全面サポートのもと、ハウスマスター 4 名、インターン生 1 名、

調理員さん７名体制で運営されています。

知夫小中学校同様、はぐくみ寮にも多くの地域の方が出入りし、時には先生、時には生徒、時には保護者のような存在になりながら、子どもと寄り添っています。人数が少ないということは、それだけ一人ひとりの役割は大きく、活躍の場も多いということです。子どもたちは、少人数という環境の中で、自分が持っている力を発揮しています（図5）。

図5　はぐくみ寮での暮らし

島留学生の保護者からは「知夫小中学校ならではの体力向上の取り組みが本人のためになっている」「帰ってくるたびに成長を感じる」「いろいろな方の助けをどんどん借りて知夫の生活を楽しんでもらいたい」などを声が聞かれます。

（2）島の暮らしを楽しむ、挑む「100 の約束」

100 の約束は、「知夫里島島留学生がやりたいことを５年間で 100 個叶える応援をする」取り組みとして令和元年度からスタートしました。（図6）知夫里島には、コンビニ・ゲームセンター・信号など、便利なものは何もありません。しかし、壮大な自然や魅力的な人で溢れており、知夫里島だからこそ学べることがたくさんあります。島留学生は地域の力を借りながら、島でのたくさんの思い出を作ります。知夫里島で大事にされている歴史･文化･価値観にどっぷり浸かり、熱中するものを見つけてられることを願います。

令和４年度に実施された「100 の約束」

○ピザを焼いてみよう
○イチゴジャムをつくろう
○夜釣りに行こう
○歩いて知夫を１周しよう
○ドライイチジクをつくろう　　等

図6「100 の約束」活動内容

4. 教育フォーラムの開催

小中一貫教育の推進に向けて、本村はこれまでそれにかかわる教育フォーラムを開催してきましたが、コロナ禍によって人が集うことが制限され、教育フォーラムも実施されませんでした。

昨年度、３年ぶりの開催に向けて企画が始まりました。前年度に整理された「知夫里島学び舎構想～子ども×大人のふるさと教育～」の実現につながる教育フォーラムをコンセプトに、午前の「遊びやガーデン」、午後の「学びやガーデン」が実施されました。

（1）ふるさとを共に遊び、体験する「遊びやガーデン」

コロナ禍でいろいろな行事、イベントが中止されたことによって、「地域文化に触れる場」「住民が交流する場」が失われました。ふるさと教育を推進してくために重要となるこの2つの要素をつなぎ合わせ、村の社会教育委員が主体となって「もちつき交流」「皆一太鼓体験」「蛇巻き体験」「サザエタワーコンテスト」などのコーナーが設置されました（図7）。雪が積もる寒い時期での開催でしたが、子どもから高齢者まで人口の５分の１くらいの住

民が知夫小中学校の校舎に集まり、にぎやかな時間と空間をつくっていました。通常であれば男性だけの出番とされる皆一太鼓や蛇巻きに女性の姿が見られたことは、今回のイベントならではのものでした。こういった光景は今後の地域行事再開の際に何らかの変化をもたらすのではと期待しています。

図7　蛇巻き体験

（2）子どもたちのために大人の「やってみたい」を提案する「学びやガーデン」

「大人からの提案発表によって子どもたちの挑戦力や行動力を高めていくきっかけになってほしい」「多世代対話型の作戦会議によって協働する楽しさを感じてほしい」そういった願いからこの学びやガーデンは企画されました。産業からは「いわがき『絆』プロジェクト」、教育からは「島留学100の約束プロジェクト」、福祉からは「島を支える福祉の仕事プロジェクト」の発表があり、3つの教室分科会に分かれて提案がよりよくなるための作戦会議を行いました（図8）。子

図8　分科会による作戦会議

どもたちの参加が少なかったことは残念でしたが、参加者からは「いわがきで絆ができて、それが続いていったら楽しそう。」「出荷されるまでの作業の中で一緒に体験したりできたら楽しそう。」などの感想がありました。

教育委員会としての新たな挑戦というかたちでのフォーラムでしたが、子どもたちにとって地域にとってよりよい内容や方法を探り続けていきたいと考えています。

5. 成果と課題

（1）成果

①何よりも「学び舎構想」をつくって終わりにするのではなく、具現化に向けて意識しながらふるさと教育、島留学、教育フォーラムを実施できたことが有意義でした。また、「小さい」「少ない」「せまい」という特性を本村の強みとして生かしながら事業を展開することができました。

②年度初めの早い段階で「ふるさと教育わくわく大作戦」を仕掛けることができたので、各学年で学習活動の見通しを持つことができました。また、先生方も「やってみたい」と地域の「ひと・もの・こと」に対する関心を高めることができ、教育委員会スタッフに声をかける姿が多く見られました。

③住民参加型の教育フォーラムは、多くの方が足を運ぶだけでなく活躍する場となり、社会教育が目指す「人づくり」の実現に向けたきっかけづくりの場となりました。今後はより主体的、協働的に行動できる人づくりに向けた仕掛けの工夫が求められ、住民のつながりづくり、生きがいづくりをより豊かにしていきたいと考えています。

（2）課題

④生活科、総合的な学習の時間の学習活動は活性化されたように見えるところもありますが、各学年で「どのような力を高めていくか」という点においてはまだまだ検討していく必要性を感じています。学び舎構想の中核に位置する意義を問い続け、学校と協議を続けていきます。

⑤知夫里島島留学が7期目を迎えますが、今年度は多くの寮生が昨年に引き続きの参加となります。これまで

のコロナ禍の影響で、地域とつながりながら活発な活動ができたかというと十分とは言えませんでした。今までの経験を生かしながら、より積極的な展開ができるよう社会教育との連携を強めて臨みます。

⑥知夫里島教育フォーラムにおいて唯一ねらいを達成できなかったことが、学びやガーデンにおける小中学生の参加です。子ども達のための提案ということだったので、子ども達の関心も高めることができるのではと考えていましたが、なかなかハードルが高かったようです。どのように学校と連携を図っていくのかということを探りながら、発展させていきたいと思います。

おわりに

「子ども×大人のふるさと教育」は、子ども達にとっての多様な経験や各教科で培われた力を発揮したりできる学びが展開されなければなりません。地域とのかかわりを豊かにしていくことで対応力を高めることができ、課題解決のための行動力は地域づくりに還元されることにもなります。学習にかかわる大人も子どもの失敗を見守りつつ、地域づくりに向けて本気で子ども達にかかわってもらいます。

教育による地域づくり。知夫里島学び舎構想はその実現に向けてのビジョンでもあり、マップでもあります。この特徴ある一体型校舎と同様に構想も発展的活用を考え続けられる教育委員会でありたいと思います。